

保育者養成校における読譜指導に関する一考察

——基礎の基礎に焦点を当てて——

A Study on the Teaching of Music Reading at a Training School for Nursery School Teachers: Focus on the fundamentals of the foundation

杉山 雄一

Yuichi Sugiyama

はじめに

筆者は令和3年度より短期大学こども学科において、音楽に関する授業を担当している。幼児教育の感性と表現に関する領域「表現」においては、その手段として音楽すること、中でもピアノによる音楽表現は欠かせないものである。一方、保育者を目指して本学に入学してくる学生の音楽的資質は、千差万別である。幼い頃から継続してピアノを習っている者、ピアノは習っていないが音楽が好きでブラスバンド部や合唱部に所属していた者、音楽は嫌いではないが苦手意識を持つ者など、ピアノで表現する力は無論のこと、音楽に関する知識量についても個人差が大きい。そのため、入学後には音楽に関する充実した指導^{注1)}が欠かせない。

さて音楽に関する知識についてはさまざまな内容があるが、ピアノによる音楽表現に最低限必要なのは、楽典の知識であろう。楽典とは、「音楽に用いる音を楽譜に記すための約束あるいは規則を説明する理論」¹⁾で、「実際の楽譜の読み方を教えるもの」¹⁾である。ここで言う「楽譜」とは、西洋音楽で用いられる五線譜のことであるが、本学学生の中には全く五線譜が読めない者が存在する。^{注2)}五線譜が読めなくても範奏を見て模倣する、所謂耳コピをするなどの方法でピアノを弾くことはできる。しかしそれが可能なのは、あくまで大学の授業で指導者がいる時に限られる。五線譜に書かれていることの意味を知り、ピアノによる音楽表現への応用法を理解していなければ、保育職に就いたときに困窮するであろう。そうならないためにも「基礎の基礎」の部分の読譜指導は不可欠であると考えられる。

本研究では、楽典に関する書籍を分析し、保育者養成校における「基礎の基礎」の読譜指導について考察する。

研究の方法

「基礎の基礎」の定義

五線譜の特徴は、時間経過、音高、曲想、奏法などの詳しい情報が一目で分かるところにある。本稿では特に「五線譜の時間経過・音高」についての知識を「基礎の基礎」と定義する。

調査対象

豊岡短期大学図書館所蔵の、楽典を扱った書籍27冊。五線譜の「五線譜における時間経過・音高」に関する記述を調査・分析し、合わせて五線譜上の音とピアノの鍵盤との関連に関する記述も踏まえ、そこから効果的な読譜指導法を導き出す。

結果と分析

楽典を扱った書籍の調査結果は表1の通りである。

表1 五線譜における時間経過・音高、及びピアノの鍵盤との関連に関する記述

	著者名(発刊年) (書籍名は引用文献・参考文献参照)	五線譜における時間経過に関する記述	五線譜における音高に関する記述	ピアノの鍵盤との関連に関する記述
1	相原宗和(1978)	記述なし。	記述なし。	記述なし。
2	青島広志(2009)	西洋では、時間の経過を視覚化する場合には、向かって左から右へ表記します。 ²⁾	西洋では、音の高低は表記の高低と一致します。 ²⁾	図表あり。
3	青島広志(2005)	記述なし。	線の名前は下から順に、第1線から第5線と呼ばれ、上に行くほど高い音を示します。線の間の空間は「間」と呼ばれ、やはり第1間から第4間までの名があります。 ³⁾	図表あり。
4	秋山公良(2015)	記述なし。	記述なし。	記述なし。
5	池辺晋一郎(1995)	記述なし。	記述なし。	記述なし。
6	石桁真礼生他(2001)	記述なし。	音の相対的な高低を記譜するのに五線が用いられる。各線および各間の名称は次のとおりである。 ⁴⁾	図表あり。
7	大蔵康義(1999)	現在世界で最も広く使われている楽譜は西洋音楽のもので、譜表と呼ばれる5本の線上に音高と音長をしるすというものである。 ⁵⁾		記述なし。
8	甲斐 彰(2004)	記述なし。	音楽では、音の位置を示すために5本の線を用います。線の上や、線と線の間には音符を記して音の高低を表します(記す音符の種類によって音の長さも同時に記すことになります)。 ⁶⁾	記述なし。
9	カワイ音楽企画編(1983)	記述なし。	音の相対的な高低を書きあらわすための五本の平行線で、各線および各間を用いて音の高さを区分する。 ⁷⁾	記述なし。
10	川辺 真(2002)	記述なし。	記述なし。	図表あり。

11	教芸音楽研究グループ編 (1994)	記述なし。	音の相対的な高低を示す方法として、五線が用いられる。線と線の間も用いられ、線と間が交互となり、上方が高い音、下方が低い音を示す。 ⁸⁾	図表あり。
12	鞍掛昭二他 (1997)	記述なし。	それと同時に、音の高さを示す音符や休符を書くための5本の線による五線（ふつう使われる楽譜）を用います。 ⁹⁾	図表あり。
13	黒沢隆朝 (1979)	記述なし。	高さの違う音を、紙の上書き表わ（ママ）すには、5本の平行線を引いて、その上に音を記入する。この線を五線、または譜表（Staff or Stave）とよんでいる。譜表には線（Line）と間（Space）を使い、上にいくほど音が高くなることを示している。 ¹⁰⁾	図表あり。
14	齋藤純一郎監修 (2012)	記述なし。	五線譜 楽譜に用いられる5本の平行線。この「五線」で音の高さを表すことができ、クラシック、ジャズ、ポップスなど、あらゆるジャンルの音楽に幅広く対応させることができる。 ¹¹⁾	図表あり。
15	清水 脩 (1976)	記述なし。	音楽を記録するにはまず音の高さを正確に表わす（ママ）記号が必要である。五本の平行線の上に音を表す符号である音符を書きこみ、その上下によって音の高さを示す。これを五線という。 ¹²⁾	記述なし。
16	田熊 健編 (2007)	記述なし。	音符の姿が音の長さを表し、その音符がいる五線上の場所が音の高さを表しています。ソは線の上に乗っていますので、一つ隣は線と線の間、ということになります。下方向だとファの音、上だとラの音になりますね。 ¹³⁾	図表あり。
17	近森一重 (1949)	譜表に音をしるすには、左から右へ順に書き、下から上へいくにしたがって高い音を表わす。 ¹⁴⁾		記述なし。
18	坪野春枝編 (2009)	記述なし。	記述なし。	図表あり。
19	供田武嘉津 (1997)	記述なし。	音の高低は、五本の線と、それらにはさまれる四つの間に音を配することによって示されるが、これを譜表という。このように譜表では、線と間が交互となり、上方につれて、より高い音が示される。 ¹⁵⁾	図表あり。
20	長沼由美他 (2007)	楽譜は、左から読んでいきます。（中略）つまり、五線の横方向は、音楽の時間の流れを示しているのです。一方、縦方向は音の高さを示し、五線の上の方にある音ほど高く、下の方にある音ほど低い音になります。 ¹⁶⁾		図表あり。
21	橋本国彦他 (1955)	さて、五線に音を記すには、左から右へ順に書き、この五線の中では第一線がいちばん低く、上へいくにしたがって高い音を表す。 ¹⁷⁾		図表と説明あり。
22	早川史朗他 (1996)	記述なし。	楽譜では音の高低を表すため、五本の同長・同間隔な水平線を用いるが、それを五線という。 ¹⁸⁾	図表あり。
23	三室戸文光他 (1969)	譜表に音を記すには、その線上や間に音符を左から右へ順に書き、上にいくにしたがって高い音をあらわす。 ¹⁹⁾		記述なし。
24	山縣茂太郎 (1958)	音符（おんぷ）は、線と間（かん）に、左から右へとしるされる。眼で見て、上の方のものが、下のものよりも高い音であることを示す。 ²⁰⁾		図表あり。
25	山下 正編 (2021)	記述なし。	記述なし。	図表あり。
26	Bitsch, M. 他 (1979)	音の持続（横座標）。旋律を左から右へ読む。 ²¹⁾	音の高低（縦座標）和音構成音を下部から上部へ読む。線および線間は下部から上部へ数えられる。 ²¹⁾	記述なし。
27	Taylor, E. (2002)	記述なし。	記述なし。	図表あり。

五線譜における時間経過に関する記述

上記27冊中五線譜上の時間経過に関する記述があった書籍は8冊(29.6%)、記述のない書籍は19冊(70.3%)であった。楽譜の説明をするのに、楽譜をどの方向に読むかについて記述がなされている書籍が少ないのは驚きである。西洋の言語は左から右へ読むのは誰もが知るところである。五線譜も同様に左から右へ読むことは周知の事実である、という固定観念があるのだろうか。

五線譜における音高に関する記述

上記27冊中五線譜上の音高に関する記述があった書籍は20冊(74.1%)、記述のない書籍は7冊(25.9%)であった。音には高低、大小、音色の三つの要素があり、これを音の三要素という。五線譜では音の高低を音符の五線譜上の位置で表すため、読譜指導においてその記譜法については説明が必要であろう。それでも2.5割の書籍に音高の見方についての記述がないのは意外である。

ピアノの鍵盤との関連に関する記述

音名とピアノの鍵盤との関係を明示している書籍は27冊中17冊(63.0%)、明示していない書籍は10冊(37.0%)であった。楽典を扱った書籍は、本来ピアノ演奏技術の習得を目的としておらず、ピアノの鍵盤との関連が明示されていなくても楽典の説明はできる。しかし、ピアノという楽器は音を視覚的にとらえやすいため、読譜指導においては、五線譜上の音との関連付けがあった方がより親切であろう。

五線譜における時間経過・音高、及びピアノの鍵盤との関連に関する記述

上記3項目全てについて記述している書籍は、27冊中5冊(18.5%)、全く記述のない書籍は3冊(11.1%)、1項目、あるいは2項目について記述のある書籍は19冊(70.4%)であった。調査対象の書籍は、初歩のものから音楽大学の授業で使うようなものまで、さまざまな種類があった。専門的な内容を学ぶ者にとっては、「五線譜は左から右へ読む」、「上に行くほど高い音」、「ここを押さえれば『ド』の音が出る」などは明白なことであろう。だが、「周知の事実」は、対象になる人間が変われば違った面を見せる。読譜指導において指導者は、そのことを理解しておく必要がある。

考 察

楽典に関する書籍の「基礎の基礎」の部分进行分析してわかったことは、必ずしも必要十分な内容が網羅されていないということである。読譜にあたり基礎的な説明がなされなければ、楽譜は、それを読めない学生にとってはただの暗号となる。五線譜に関して何の知識も身につけていない者の身になって指導する必要がある。そこで筆者は保育士養成校における「基礎の基礎」の読譜指導について、次のように提案する。

指導の前提

まず楽譜とは音楽を記録し、再現するための媒体となるものであることを認識させる。その上で、五線譜には時間の経過、音の高低などが記述してあり、それらが一見して分かるようになっていることを説明する。

次に音には高低があり、「ドレミファソラシド」は音の高さを表す音楽用語であることを確認する。「人間の耳に聞こえる音の数は無数」²²⁾に存在しており、人間は「その中からいくつかの音を割り出し、これに名前を付けて音楽に用いて」²²⁾いることを理解させる。「ドレミファソラシド」という音の並びはそのうちの一つであり、絶対的な音の高さを表している^{注3)}こと。そしてド→レ→ミ→ファ→ソ→ラ→シ→ドの順に1音ずつ高くなることを説明する。

五線譜における時間経過について

まず五線譜は、「左から右へ読む」との説明は必要不可欠だ。楽曲の進み具合は、全体の速さ、書かれている音符の種類によって変化するので、これについては五線譜の読譜に慣れてから指導する。なお、「複数段五線がある場合は、最上段左から右へ読み始め、下段へと読み進める」ことに言及している書籍は皆無であったが、この点についても言及する必要がある。

五線譜における音高について

五線譜における音高は、山縣の「眼で見て、上の方のものが、下のものよりも高い音である」²³⁾という説明がシンプルで的を射ているであろう。ただ、「下」と「上」という説明にも注意が必要である。楽譜が机上で開かれている時、「下」とは「自分から見て手前」であり、「上」とは「自分から見て奥」である。

三室戸・小出は五線上の音高と時間を、下記のように説明している。

譜表は五線ともいい、同じ長さ、同じ間隔の5本の水準線からなり、その線と線の間とをもちいる。五線とその4つの間は、下から上に数えてつぎの図のようによぶ。譜表に音を記すには、その線上や間に音符を左から右へ順に書き、上にいくにしたがって高い音をあらわす。

引用文の「つぎの図」とは、図1のようなものである。^{注4)} 学生向けにさらにかみ砕いた表現にするならば、上記の文章に加えて、五線上では第1線→第1間→第2線→第2間～の順に1音ずつ高

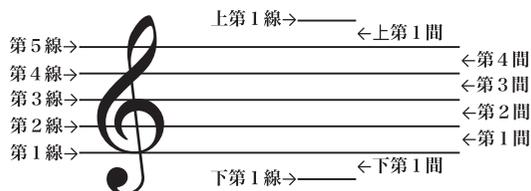


図1

くなる、と説明することが必要であろう。つまり図2では、音符 a よりも音符 b が 1 音高く、音符 b よりも音符 c が 1 音高くなる。

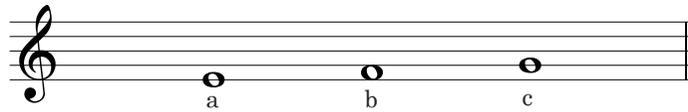


図 2

ピアノの鍵盤との関連について

「基礎の基礎」を考えるならば、ピアノには白鍵と黒鍵があること、当初は白鍵について考えることを説明する。その上で、ピアノは左側の鍵盤を押さえると低い音、右側を押さえると高い音が出る、という説明も欠かせない。ピアノの鍵盤の高低に関する認識は後天的なもので、学習して初めてそのように反応できるようになる。^{注5)} 図2の音符はピアノの鍵盤に置き換えると図3のようになる。白い鍵盤を一つ隣に移動するごとに一つ高い音になることを確かめながら指導するのが良いであろう。五線譜の読譜と合わせて、ピアノの音高の変化についても理解しながら次の段階へ進むのが良いであろう。

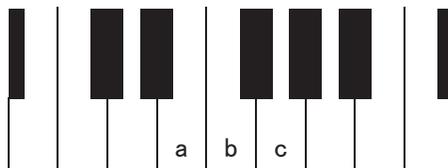


図 3

今後の課題

楽典を扱った書籍を調査・分析し、読譜指導の「基礎の基礎」に焦点を当てて考察してきた。今後はこの読譜指導を、次の段階、つまり読譜から得た情報をいかにピアノ表現に結びつけるか、その方法について考察することが課題であると考え。既知の事柄を当たり前のこととせず、常に学生の視点に立った指導を考えていきたい。

引用文献

- 1) 浅香 淳(編). (1991). がくてん 楽典. (新訂) 標準音楽事典: アーテ (p.382). : 音楽之友社.
- 2) 青島広志. (2009). 究極の楽典: 最高の知識を得るために (p.6, p.8). : 全音楽譜出版.
- 3) 青島広志. (2005). クラシック音楽をもっと楽しむ!: やさしくわかる楽典 (pp.10-11). : 日本実業出版社.
- 4) 石桁真礼生・末吉保雄・丸田昭三・飯田 隆・金光威和雄・飯沼信義. (2001). 新装版楽典: 理論と実習

- (p.17). : 音楽之友社.
- 5) 大蔵康義. (1999). *音と音楽の基礎知識* (p.41). : 国書刊行会.
 - 6) 甲斐 彰. (2004). *楽譜が読める・弾ける : ステップ20* (p.19). : 音楽之友社.
 - 7) カワイ音楽企画 (編). (1983). *音楽の理論* (p.8). : 河合楽器製作所・出版事業部.
 - 8) 教芸音楽研究グループ (編). (1994). *音楽通論* (p.28). : 教育芸術社.
 - 9) 鞍掛昭二・広中宏雄・若林延昌・小桜秀爾・山田輝子. (1997). *音楽の基礎 : 音楽理解ははじめの一步* (p.15). : 音楽之友社.
 - 10) 黒沢隆朝. (1979). *音楽講座 楽典* (三訂) (p.19). : 音楽之友社.
 - 11) 齋藤純一郎監修. (2012). *早引き 音楽記号・用語事典* (p.26). : ナツメ社.
 - 12) 清水 脩. (1976). *標準音楽通論* (p.25). : 音楽之友社.
 - 13) 田熊 健 (編). (2007). *読んで覚える楽譜のカラクリ* (p.10, p.12). : 自由現代社.
 - 14) 近森一重. (1949). (新訂) *音楽通論* (p.25). : 音楽之友社.
 - 15) 供田武嘉津. (1997). *最新 : 学生の音楽通論* (p.9). : 音楽之友社.
 - 16) 長沼由美・二藤宏美. (2007). *読んでわかる! きいてわかる! 楽譜の読み方 : 大人の楽典入門* (p.23). : ヤマハミュージックメディア.
 - 17) 橋本国彦・下総皖一. (1955). *模範音楽通論* (p.15). : 全音楽譜出版社.
 - 18) 早川史朗・佐藤巨弘. (1996). *子どもの歌でまなぶ : 楽典のエチュード* (p.6). : エー・ディ・エム.
 - 19) 三室戸文光・小出浩平. (1969). *新しい音楽通論* (p.24). : 音楽之友社.
 - 20) 山縣茂太郎. (1958). (新訂) *音楽通論* (p.16). : 音楽之友社.
 - 21) Bitsch, M., & Holstein, J. -P. (1979). *音楽覚え書き帖* (p.1). (池内友次郎, 訳). : 音楽之友社.
 - 22) 前掲書12). (p.19).
 - 23) 前掲書20). (p.16).

参考文献

- 相原宗和. (1978). *音楽の概論*. : 音楽之友社.
- 秋山公良. (2015). *よく分かる音楽理論の教科書* (第2版). : ヤマハミュージックメディア.
- 平井恭子. (2016). *音楽的な遊びに見る乳幼児の発達 : 第4巻 4歳～5歳編*. : 株式会社新宿スタジオ.
- 池辺晋一郎. (1995). *音楽指導ハンドブック : おもしろく学ぶ楽典*. : 音楽之友社.
- 川辺 真. (2002). *音符と鍵盤で覚える : わかりやすい楽典*. : 音楽之友社.
- 小林一夫. (2012). *スラスラ解ける二者択一方式 : 必勝! 楽典問題集*. : 中央アート出版社.
- 水町 愛. (2010). *音楽教育における読譜指導についての研究 : 小学校学習指導要領の変遷を中心に*. *九州ルーテル学院大学紀要 VISIO*, **40**, 37-45.
- 西野洋子・茨木金吾・國光みどり・石川ますみ・田上栄美子・菅原峰子. (2021). *こどもの指導法「音楽表現」*. : 学校法人弘徳学園.
- 鈴木範之. (2011). *幼稚園教諭・保育士養成校における楽典指導に関する考察*. *常磐短期大学研究紀要*, **39**, 87-95.
- Taylor, E., (2002). *楽典入門 : 第1巻 基礎編*. (山口清三, 訳). : サーベル社.

坪野春枝(編). (2009). 最もわかりやすい 楽典入門. : ケイ・エム・ピー.

山下 正(編). (2021). 世界一わかりやすい: 楽譜の読みかた. : ヤマハミュージックメディア.

注 釈

注1) 本学では1年次に, こどもの指導法「音楽表現」(主にピアノ実技・弾き歌いに関する演習と講義: 通年科目30コマ), 音楽表現論(領域「表現」の音楽に関する理論, 及び楽典の講義: 7.5コマ), こどもの指導法「リズム表現」(リズム表現の演習: 7.5コマ)を行う。また2年次には, こどもと器楽・うたⅠ, Ⅱ(ピアノ実技・弾き歌い・音楽表現に関する演習: 前期・後期で30コマ)を履修する。

注2) 本年度の楽典に関する授業で, 「大きな栗の木の下で」の楽譜をハ長調で書く課題を行った。履修生52名中, ほぼ問題なく楽譜が書けた者は37名, 4~5箇所の間違いは8名であった。残りの7名は, その楽譜から該当曲を再現するのが難しい状態であった。間違いの原因は, 次の2点についての理解不足である。

・時間経過に関して, 楽譜上ではどのように表されるか,

・音高に関して, 楽譜上ではどのように表されるか,

また別の授業でこれらの学生のピアノ指導を行っている, ピアノの鍵盤の見方, 楽譜とピアノの鍵盤との関連について理解できていないという状態であった。

注3) 今日の日本では「ドレミファソラシド」を「音名」とする場合が多いので, ここでは敢えて日本音名には触れない。日本における「ドレミファソラシド」には, 他に「階名」の役割があるが, 複雑な説明が必要なためここでは割愛する。

注4) 五本の線で表しきれない高音・低音は, 上第1間・上第1線~, 下第1間・下第1線~のように表す。

注5) 平井(2016)のDVDでは, 5歳の被験者が, 鍵盤に見立てた折り紙を右から「ドレミファソラ」と叩いて遊んでいる様子が見て取れる。